CHRONOS

Institute for Women's History & Culture
Kyoto Tachibana University

「愛情」福永凜瞳
（本学文学部学生／ tachibana photo）

平安の昔から、
「昔の人」の懐かしい思い出を
呼びおこすとされた橘の花の香り。
その橘を最も好んだ「時の鳥（ホトトギス）」。
「CHRONOS 時の鳥」は、
ギリシア神話の「時の神」クロノスを頭上に戴き、
「時」の大空をはばたく鳥を
イメージしています。

クロノス［時の鳥］vol.50 2024.3

CONTENTS

〈巻頭エッセイ〉
クロノス 50 号刊行によせて
過去に開かれた窓 5
作品のウチソト 5
歴史遺産とジェンダー 5
イギリス女性生活誌 50
近代日本音楽史を彩る女性たち 11
INFORMATION

※クロノス50号の刊行にあたり、女性歴史文化研究所の歴代所長より文章をお寄せいただきました。

クロノス三〇年の想い出

松浦 京子　女性歴史文化研究所 第3・5代所長（2002－2003・2005－2007年度）／本学名誉教授

クロノス五〇号、すなわち刊行から三〇年が経ったことになります。この間、筆者は「イギリス女性生活誌」なる連載をずっと担当してきました。ざっと振り返ってみると、やはり時の流れを感じざるを得ません。創刊のころには、女性史女性文化を標榜する研究所はまだ珍しい存在でしたから、その一般向け広報誌としての役割を担うものの歴史エッセイとしてどのようなレベルで書けばいいのだろうかと逡巡したものです。それもあって初回の「女性史から見た『社会進出』」なる一文は今読むと至って常識的な内容でしかないのですが、それでも当時は「なるほど、そういうことだったんですね、よくわかりました」という感想をいただきました。印象深い思い出です。

以来、思うままに自由に書かせてもらってきました。ただ、元来女性史は、かつて看過されてきた題材を扱い、そうすることで従来の歴史像や解釈に新たな一面を付け加えることを目指すものです。それゆえ、書き続けてきた連載の題材や話題には、意識して日本では初めてというものを取り上げてみたり、従来とは少々異なる視点や解釈を提示しようとしてきました。今ではライフワークというべきものになっており、こうした機会を与えてくださったクロノス、そして研究所に感謝するばかりです。

また、研究所所長としてクロノスの巻頭インタビュー（第一七号－二〇号、二六号）にも登場しました。こちらは赤面の至りです。とはいえ、その設定には担当の職員の方がいろいろお骨折りをくださり、社会で活躍するさまざまな女性の方々に出会えました。このことは、筆者にとって現代日本における女性を改めて考える機会ともなりましたし、読者の方にも興味深かったのではないでしょうか。

クロノスの巻末には研究所が年一回開催するシンポジウムを紹介するページがあります。このシンポジウムのテーマは実に多彩で、学際的、国際的であり、毎回学外から注目すべき方々をお招きして講演とディスカッションを実施してきています。私の所長在任中だけを見ても戦国の女性、帝国主義時代の日英の女性、ミシンと女性にまつわる経済、そして、男女共同参画社会の歩みと課題、というように研究ジャンルは文学、歴史、経済、社会政策など多岐にわたっていて、知見を深める機会となりました。最後に担当した二〇〇七年の「女性差別撤廃条約と男女雇用機会均等法をめぐって」では、この二つの成果の実現に尽力された赤松良子氏から感銘深い講演に加えて忘れがたい言葉をかけていただきました。赤松氏は「女性の地位向上のための隊列はこれからも続いていかねばなりません。その隊列の一員であることを忘れずにいてください」とおっしゃったのです。今改めて思い返すと、研究所ならびにクロノスの一層の活躍を祈念するにふさわしい言葉のように感じられます。これを記すことで拙文を閉じたいと思います。

二月七日、赤松良子先生の訃報が伝えられました。哀悼とともに改めて感謝の意を表したく思います。

女性歴史文化研究所発足のころ

細川 涼一　女性歴史文化研究所 第6代所長（2008－2011年度）／本学名誉教授

京都橘大学（当時は京都橘女子大学）女性歴史文化研究所が発足したのは、開学二十五周年に当たる一九九二年十二月のことであり、初代所長は田端泰子先生であった。橘は当時、「自立した女性の育成」を建学の理念とする文学部単科の女子大学であり、女子大学としての特色を生かした学問研究のセンターが模索されていた。

本学は一九六七年四月に橘女子大学として開学しているが、のちに日本の女性史研究で著名になる脇田晴子先生（一九三四～二〇一六年）は、開学と同時に橘女子大学に赴任しており、田端先生は開学三年目の橘への赴任である。脇田先生を中心に、田端先生も加わった「女性史総合研究会」は、一九八二年に『日本女性史』全五巻（東京大学出版会）を刊行した。この『日本女性史』全五巻は、日本の女性史研究の実証的水準を引き上げるとともに、女性史研究をアカデミズムの歴史学に認知させる役割を担ったが、当時脇田先生が橘の教授だった関係もあり、『日本女性史』刊行当時の女性史総合研究会は、事実上橘に事務局を置き、女性史総合研究会が科学研究費で蒐集した女性史・女性学関係の図書も、橘の図書館に入れられた。こうした橘の「伝統」も踏まえて「研究成果を社会に還元し、日本の学術研究に貢献する」研究所として（一九八九年七月の越智武臣学長〈当時〉に対する総合計画委員会の答申）、京都橘女子大学女性歴史文化研究所は開設されたのである。開設記念シンポジウムは、鳴門教育大学を経て、大阪外国語大学教授となっていた脇田先生（その後脇田先生は、滋賀県立大学に転任された）を中心に講演が組まれた。

このように、女性歴史文化研究所の発足は、日本中世の女性史研究の水準を築いた、脇田晴子先生・田端泰子先生の学問的軌跡と軌を一にしている。私自身は関東で研究者としての自己形成をした者であり、脇田先生・田端先生の「弟子筋」ではないが、日本中世史を学ぶ者として、お二人の研究からは大きな学恩を受けている。この意味で、二〇二三年、女性歴史文化研究所第三〇回シンポジウムで、脇田先生・田端先生の女性史研究を女性史の研究史のなかに位置づける報告ができたことは、お二人の学恩に答える上でも、有難いことであった（その内容は、『女性歴史文化研究所紀要』三三号、参照）。

今日、京都橘大学は複数学部を擁する共学の総合大学となり、大学の理念も共学化にともない、「自立・共生・臨床の知」へと変化している。また社会的には、LGBTに見られる性的少数者をめぐる人権も、注目を集めている。しかし、戦後しばらくの一九五四年、林屋辰三郎氏が、「すくなくとも民衆の歴史というかぎりは、その半数を占める女性の立場を考慮しなくては、ほんとうの民衆生活を理解できるものではない」と述べたような（『歌舞伎以前』岩波新書）、女性の社会への進出と男女平等は、今日なお日本では実現途上にあるといえよう。この意味で、歴史上無視されてきた「半数」（「大多数」の少数者）の歴史・文化を解明する女性歴史文化研究所の役割は、今日なお失われていない、と私は考える。

個人的位置から考える

高久 嶺之介　女性歴史文化研究所 第7代所長（2012－2013年度）／本学名誉教授

きわめて個人的位置から女性歴史文化研究所を考えたいと思う。

私が前の大学を退職して、本学に迎え入れられたのは二〇〇八年四月である。

実は本学に入る直前から女性歴史文化研究所とのかかわりをもっていた。私は、本学に入るまで確か二年間ほど本学文学部で非常勤講師を務めていた。その縁があってか、二〇〇六年に女性歴史文化研究所からの依頼により、同年九月九日、クレオ大阪（大阪市女性協会）で講演した。講演は身近なところで、講演の素材は秋田県で全生涯、もしくは大半を過ごした私の母高久タケと義母である私の妻の母柏原シゲであった。講演のねらいは、二人の母の昭和戦前期を中心にした昭和史であり、近代の庶民の女性たちの多様な生き方を、大正から昭和戦前期の時代背景をもとに描く試みであった。

実は、私はそれまで女性史について一本も書いたものがなかった。依頼があった時、最初、戸惑ったのも当然である。しかし、一度やってみるのもおもしろいと考え直した。私の母や妻の母は昭和の初期、小学校高等科までの学歴しかない（多くの女性がそうであった）。しかし、この無名で、高等教育を受けていない女性たちを取り上げてみたいと思った。また、私が地元の高校を出て大学に行くまで、もちろん大学に進学する男子は少なかったし、女子はそれ以上に少なかった。そういう女性の明治・大正・昭和の姿を自分なりに理解しようとする個人的想いもあった。

また、大正や昭和の女性をたまたま、ある特定の規範（たとえば「良妻賢母思想」―必ずしも古いものではないが）や教育の影響ということが語られる場合がある。そういう規範が結果的に言説研究を中心として行われていることも気になっていた。できれば、そういう規範にくくられない女性史を描きたかった。母や義母を描くのはそういう意図があった。

京都橘大学の女性歴史研究も特定の理論や方法があるわけではない。ある面では、多様な面をもちながら「実証主義的スタイル」を維持したから、今日まであるのだと思う。

私は、二〇一二年と一三年の二年間所長をつとめたが、他の所長と異なる成果を社会的に上げたとはおもえない。しかし、私個人にとっては女性歴史文化研究所および京都橘大学の教育は意味があった。たとえば、文学部のカリキュラムに西洋史の教員と日本史の教員が一緒に女性史を講義し、また討論する授業があった。私が授業を行った時、西洋史の教員は松浦京子先生であった。イギリスの近代の女性の社会的位置がかつて日本で考えられているほど大きな差がないというのが新鮮であった。私が取り上げようとしたのは、明治・大正・昭和の農村と地方の町場の女性のあり方であった。

私が本学を退職するのは二〇一七年三月であるが、本学に就職する前に講演した内容をさらに事実を付け加えて退職直前に「母たちの昭和史―高久タケ・柏原シゲ―」という論文として『女性歴史文化研究所紀要』に発表した。この論文は、これまで多くの論文を書いてきたが、事実の不明な点はあるものの様々な私の仕事のうちでなぜかもっとも気に入り、思い入れのある作品となった。

きわめて個人的な想いを書いたが、京都橘大学が女性歴史文化研究所を維持しながら、発展していってほしいと思う。

女性歴史文化研究所にかかわるふたつの思い出

南 直人　女性歴史文化研究所 第8代所長（2014－2017年度）／立命館大学教授

『クロノス』五〇号おめでとうございます。女性歴史文化研究所の広報誌として、じつに深くかつ多様なテーマを取り上げ、学術的な女性史研究に大きな貢献を行ってこられたことを、第八代目の研究所長として誇らしく感じております。二〇一四年から二〇一七年までの四年間の在任期間の中で、私の思い出として二つ心に刻まれたことを紹介し、お祝いのメッセージといたします。

ひとつは二〇一五年頃だったと思うのですが、京都橘大学が大学基準協会による外部認証評価を受け実地調査が行われた際、最後の取りまとめの懇談の場で、評価委員会の長を務められた先生に「女性歴史文化研究所はこの大学の『肝』のような存在ですね」と言われたことです。初代の研究所長の田端泰子先生以来の女性歴史文化研究所の研究活動が、こうした外部認証評価の場において改めて高く評価されたのだということを、その場に居合わせた私は実感しましたし、大学が質量ともに拡大していく中でも、やはり女性歴史文化研究所が京都橘大学の核なのだということを、外部の目から評価していただいたことに勇気づけられた思いがしました。

もうひとつは私が代表を務めさせていただいた第12プロジェクト「装いと身体の歴史」についてです。自分の力不足もあり、なかなか企画の具体的内容を決めることができず右往左往しているなかで、田端泰子先生と当時健康科学部長であった日比野英子先生（現本学学長）に論文執筆とともに編者としても協力していただき、文学部の松浦京子先生、林久美子先生、王衛明先生、小林裕子先生、非常勤講師（当時）の米澤洋子先生のご寄稿を得るとともに、看護学部の河原宣子先生、理学療法学科の横山茂樹先生にもコラムのご執筆を快諾していただきました。これにより、この論文集は人文・社会・自然科学の枠を超えた学際的な性格を帯びることができました。さらにありがたいことに、立教大学名誉教授の北山晴一先生、滋賀県立大学（当時）の橋本周子先生という学外からのご協力も得られました。これら諸先生方のお力添えと、快く出版を引き受けてくださった昭和堂のご尽力もあり、何とか私の在任中に『身体はだれのものか』として刊行まで漕ぎつけることができました。改めて感謝いたします。

女性歴史文化研究所のプロジェクトは、その後第13プロジェクト「社会における女性の活動―京都とその周辺を舞台にして」、第14プロジェクト「女性を取り巻く環境」と順調に取り組まれているようです。それぞれを担当されておられる増渕徹先生、野田泰三先生のご尽力に心から敬意を表したいと思います。それとともに、今後も京都橘大学の「肝」としての女性歴史文化研究所のますますのご発展を心から願っております。

過去に開かれた窓

5

尾下 成敏
本学文学部歴史学科教授

女性が鞠を蹴ったことをどう見るか

蹴鞠（けまり・しゅうきく）は、鞠足（まりあし）がキックとパスを繰り返し、革製の鞠を地面に落とさないように協力して、これを右足で蹴り上げ続けるという芸能です。鞠を蹴る時に大事なことの一つは鞠を上げ続ける回数で、数は多いほどよいとされます。また蹴る際はすり足で足を進め、「うるわしく」蹴ることが重んじられます。蹴鞠のゲームとしての特徴は、つぎの三点です。①勝ち負けは原則としてない。②鞠足が鞠を地面に落とさぬよう協力して、できるだけ多くの回数、これを空中に蹴り上げ続ける。③鞠場（蹴鞠のコートのこと）に立てられている懸（かかり）の木にかかって、様々なコースをたどって落ちてくる鞠を蹴り上げる。以上から、蹴鞠がサッカーと異なることは明白でしょう。

現在の蹴鞠のルーツは十三世紀に確立した公家鞠にあるとされます。「公家鞠」と言うと、貴族（皇族や公家）のみが楽しむ芸能というイメージが浮上しますが、それは正しい認識ではありません。十二世紀末には源氏将軍や御家人たちも鞠足としてプレーしていますし、僧侶の中にも蹴鞠を嗜む者がいました。戦国時代の大名や国人の中にも鞠を蹴る者が多くおり、江戸時代は蹴鞠を楽しんだ庶民が多くいたようです。このように、階層を問わず受容された蹴鞠ですが、明治以降は西洋化の進展と平行するかのように衰退することになります。現在は京都やその周辺等で蹴鞠の実演を目にすることはありますが、鞠足を務める人の数は多くなく、保存や普及に当たる団体も少ないです。

ここ八年ほど、私は蹴鞠史の研究に取り組んでいます。蹴鞠の研究は歴史学だけでなく、日本文学や体育学でも行われていますが、研究の蓄積は乏しく、分からないことが沢山あります。そうしたことの一つに女性と蹴鞠の関わりがあります。昨年、私は『女性歴史文化研究所紀要』三二号に「戦国時代の鞠足「中納言」について」という小文を寄稿しました。この中で私は、①戦国時代の京都の蹴鞠の会（以下、鞠会）において、「中納言」と呼ばれる女性が男性とともに鞠を蹴った事実を明らかにし（従来、女性鞠足の出現は江戸時代とされていた）、②男女がともに鞠を蹴るという点を重く見るなら、「中納言」出場の鞠会は現代の蹴鞠界のあり方と系譜上つながること、③十六世紀の蹴鞠道家である公家の飛鳥井家は、男性のみを鞠足として想定していたことを指摘しました。以下では、この十六世紀の女性鞠足について考えてみたことを記すことにします。

鞠会のうち、公式の会とも言うべき晴（はれ）の鞠会では、枝に付けた鞠（枝鞠（えだまり））を鞠場に運び、これを場内に置き（置鞠（おきまり））、つぎにこれを枝から解きはなす儀式（解鞠（ときまり））を行います。こうした儀式を伴う鞠会を「枝鞠の会」と呼ぶことにしますが、十六世紀京都の鞠会に関する史料を見ると、枝鞠の会が催されることは稀で確かな事例は七例です（詳細については、拙稿「戦国織豊期飛鳥井家の破子鞠の会について」『藝能史研究』二三四号を参照）。枝鞠の会の開催数の少なさは、公式の鞠会の開催数が少ないことを示唆するのかもしれません（十六世紀京都における鞠会の事例はおよそ八五〇例）。

女性鞠足「中納言」の鞠会参加事例は二例です。いずれも皇族の伏見宮邸で行われた会です。これらの事例について記す『言継卿記（ときつぐきょうき）』（公家の山科言継の日記）を見ると、枝鞠の存在は確認できません。なお、この日記の記主言継は鞠足として幾度も鞠を蹴り、日記の中に蹴鞠に関する貴重な記述を残しました。枝鞠の会についても詳細な記述を残しています。それゆえ、「中納言」が出場した会は、枝鞠の会ではないと考えられます。なお、今のところ、十六世紀の京都で催された枝鞠の会に、女性の鞠足が出場したことは確認できません。

十六世紀の鞠会に関する事例収集については不完全なところがあり、断定的な発言は控えねばなりませんが、今述べたことを踏まえると、女性が鞠を蹴ることは全面的に禁じられていたわけではないとしても、枝鞠の会から女性鞠足が事実上排除されていた可能性が浮上します。

ところで、蹴鞠の保存・普及に努めている蹴鞠保存会（しゅうきく）は、一九六〇年代以降、女性鞠足の晴会（公式の鞠会）出場を認めています。今日の晴会も枝鞠の会です。実際、京都御所等で行われる蹴鞠保存会の実演を見学すると、解鞠の後、男性鞠足とともに鞠を蹴る女性鞠足の姿が確認できます。すでに述べたように、男女がともに鞠を蹴るという点を重視すれば、「中納言」が出場した鞠会と現代の晴会との間には共通点があると見てよいでしょう。それゆえ、「系譜上つながる」と主張したわけです。全く異質とは言えません。

しかし、この二つが全く同質とは言えないことにも留意すべきでしょう。例えば女性が枝鞠の会に出場できたかどうかは重要です。何故なら、この点は十六世紀の蹴鞠界と二十一世紀の蹴鞠界の相違点を示す可能性があるからです。本当に違うのかどうかを見定めるためには、さらなる史料収集が必要でしょう。また十六世紀の女性観の問題を検討してみる作業も必要かと思います。これらはみな今後の課題です。

蹴鞠に興じる女たち（井原西鶴著『好色一代女』の挿絵、国立国会図書館デジタルコレクションより転載）

美を求める心

寺坂 昌三　本学文学部日本語日本文学科教授

美しいものに憧れを抱いたり、身近に置きたい、いつも眺めていたいと願ったりするのは、古今東西を問わず多くの人に共通する思いでしょう。

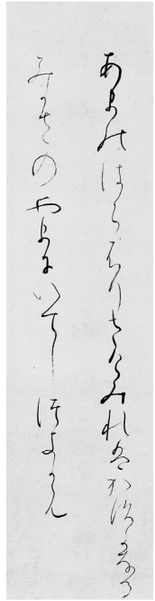
私の専門分野である仮名書道では、書美の典型として古筆を学びます。

もともと固有の文字を持たなかった我が国は、表意文字である漢字の音を借りて表音文字である仮名を生み出し、日本語を書き表すようになります。この仮名の発生から、完成、成熟するまでの過程において書き残された資料を古筆と呼びます。

多くの古筆が現存しますが、「高野切」「関戸本古今集」「寸松庵色紙」等はその代表的な名品です。仮名書道を学ぶ人以外でも聞き覚えがあるのではないでしょうか。文字そのものは記号ですが、私たち日本人はそこに書美を見い出し、尊重してきました。

そこに美があると認識するのは私たちです。美を認識する私たちがいなければ、対象物はただの物や形、音楽であるなら音でしかありません。

何のどこに美を感じるかは人によって異なりますし、国や地域、時代によっても異なります。また、一時期において多くの人に美としてもてはやされても、しばらくすると美とは認識されなくなっていくものもあります。



高野切第一種「あまのはらふりさけみればかすがなる　みかさのつきにいでしつきかも」

そうした中で、仮名書における古筆は書かれてから八百～千年を経て今に至るまで書美として高い評価を受け続けています。本学の書道コースをはじめ、書道を専門的に学ぶ高校、大学、一般の方々のすべてが教材として学んでいるのです。

それにしても、紙に書かれた筆文字が今に伝えられているというのはすごいことです。いくら大切に保存されていたとしても、長い年月の内には風水害や地震などの自然災害が何度もあったでしょうし、火災に遭うこともあります。戦乱の時代には戦術として火を放ち、そのために焼失した建造物や歴史的資料などは数えきれないのです。

仮名古筆ももちろん例外ではなく、失われたものも多数あります。それでも、その時代、時代に所有していた人々の「守り続けていかなければ」という使命感のリレーによって、今に伝わっているのです。

燃え盛る炎に怯え、家族の手を引いたり、家財道具を積んだ荷車を引いたりしながら逃げ惑う人々の中で、この名品だけは命に代えてもと炎をかいくぐって古筆を守った、そういう場面があったのではないでしょうか。あくまでも想像ですが、私にはそういう人の姿が見えるような気がします。

美を求める心は、自分自身に向かうこともあります。物や形、音等に美を認識する私たちの心が、自らを美しくありたいと願うのです。

人の美しさとは何でしょう。定義づけるのは難しいのですが、一つは外見的な美しさです。個人差はありますが、それぞれに外見を気にして生活しています。

もう一つは、内面の美しさです。思いやりやいたわり、弱者を支え守り慈しむ心、目標に向かっていく努力や困難に立ち向かう勇気、共に喜んだり悲しんだりする感性など、人の内面は行動となって表われます。

将棋の世界には「投了」という行為があります。劣勢になりもう勝てないと悟った際、勝敗が決する前に「負けました。」と自ら相手に告げるのです。

勝負の世界ですから、勝つことが最も重要なはずです。プロ棋士であっても人間ですから、ミスする可能性はあります。最後まで粘れば何があるかわかりません。勝ち負けという点からすると最後まで粘るのが正しいのでしょう。けれども、高段者であればあるほど、相手の技量を尊重し、これ以上続けても勝敗は決していると考えて投了します。この潔さに棋士としての美学があるのです。

このような有り様はスポーツの世界にも見られます。高いレベルで競い合う人たちの勝敗を超えた美しい姿に感動した経験は皆さん持っていますよね。

少し古い話にはなりますが、私はロサンゼルスオリンピック（一九八四年）男子柔道無差別級決勝を思い出します。当時、日本の山下泰裕選手は無敵でした。誰もが山下選手の金メダルを疑いませんでした。ところが二回戦で脚に重傷を負ってしまいます。決勝戦は歩くのも辛そうでした。相手からすれば、痛めた足を狙って攻めれば勝てるという状況です。

決勝の相手、エジプト代表のラシュワン選手はそうしませんでした。正攻法で堂々と戦いを挑み、結果として敗れました。執拗に脚を攻めることは、勝負という面では正しい作戦です。そうすれば、おそらく金メダルは彼のものでした。けれども、彼は柔道家としての美学を貫いたのです。

彼の戦い方は世界の多くの人に記憶されました。後には国際フェアプレー賞が贈られたほどです。ラシュワン選手の戦いぶりが称賛されたのは、観ていた私たちにも美しくありたいという思いがあるからにほかなりません。

美しさは、時に正しさをしのぐ価値を持ちます。

燃え盛る炎をかいくぐって仮名古筆を守ってきた人の姿を私は想像しましたが、人が生きていく上で炎となって立ちふさがる要因は様々です。社会背景や経済的な状況、周囲の人の言動、個人的な欲望など、そうした炎に惑わされて、常に美しくあることは難しいことです。

ただ、不可能だからと諦めるのではなく、人として美しくありたいと願う心は抱き続けていきたいものです。

美術が人々の美を求める心を耕し、それが美しい行動、美しい社会を築く基盤の一つになっていると考えるなら、美術における教育や作品制作、普及や発展をめざす情報発信等の様々な活動は、私たちの認識を大きく超える意義を持つと言えるのではないでしょうか。

日本の書展「うつしき春日こぼるる手をかざし」中村汀女の句　寺坂昌三 書

先史時代の鏡と性差

南 健太郎
本学文学部歴史遺産学科准教授

はじめに

過去から現代に至る性差の展開過程を考える上で、遺跡から得られる情報はいまや欠かすことができないものとなっています。遺跡の調査で確認される人間によって作りだされた遺物（土器や鉄器など）、地面に構築された遺構（住居や墓など）は、人類誕生からの営為の実態を示すものといえ、そこにどのように性差が生じていたのかを明らかにすることは重要な意味をもちます。

本論ではそのような考古資料の中でも鏡に焦点を当てます。鏡は主に姿を映すものとして現代の日常生活に不可欠なものですが、東アジアにおいては、姿見以外の役割も付されていました。日本列島の先史時代（古墳時代以前）においては、亡くなった者に添えて墓に納める副葬品として多用されましたが、そのサイズや数量、種類には墓ごとの明瞭な差異がみられる場合があり、それらは当時の階層関係や性差を紐解くための道しるべとなっています。さらにこのような差異は各地域社会で一様ではないため、それぞれの規範を比較することによって、器物とそれに伴う情報の伝播がどのような展開をみせたのかを明らかにすることができます。

このような視点に立ち、本論では東アジアにおいて政治的な背景のもとに鏡が拡散した前漢代の鏡を中心として、性差について考えてみたいと思います。

1. 前漢における銅鏡の保有

前漢は紀元前二〇六年に成立し、紀元八年の王莽（おうもう）による新の建国まで続いた王朝です。ここではその中でも前漢諸侯王と王后に着目してみましょう。前漢代は皇帝の直轄地とそれ以外の地域があり、後者は皇帝の一族や功臣に封土として与えられ、彼らは諸侯王と呼ばれていました。つまり諸侯王は前漢代の各地域のトップに君臨した存在と言えます。

諸侯王と王后の関係性について、江蘇省南京の大雲山江都王陵についてみてみましょう。本遺跡では諸侯王墓であるM1、王后墓であるM2が調査されており、それぞれの墓から銅鏡が出土しています。M1からは4面の銅鏡が出土しました。面径には大小があり、最小のものは16・4㎝、最大のものは21・4㎝でした。銅鏡はすべて草葉文鏡（11頁左上の図）と呼ばれるもので揃えられています。これに対して、M2からは1面の銅鏡が出土しました。面径は23・1㎝と非常に大きいものです。この鏡もM1と同様に草葉文鏡でした。両墓の差異で注目されるのは面数とサイズです。面数については、王墓は複数の鏡を保有しているのに対して、王后墓は1面のみの保有であることがわかります。これに対しサイズについては王墓よりも王后墓のほうが大きな鏡を保有しているという点が注目されます。鏡のサイズについてはM1・M2に仕えたと考えられる人々の墓である陪葬墓と比較するとその意味が明確となります。陪葬墓で出土した鏡は12㎝台を前後するものしかなく、20㎝に到達するような鏡は出土していません。大きな鏡の製作には高い技術力が求められ、より多くの原材料も必要となります。また大きな器物を保有することは視覚的に他者との違いを表示するのに有効です。このため大きな鏡は必然的に価値が高まります。さらに陪葬墓の鏡は草葉文鏡以外の文様の鏡であり、この点にも王墓・王后墓との明瞭な差異があります。このように王・王后が保有した鏡は特別なものであり、他者とは明確に区別されていたことがわかります。さらに王と王后の保有する鏡は、面数の面では王が、サイズの面では王后が優っており、そこには銅鏡の保有に関する規範が存在したと考えられます。このことは前漢代の階層的最上位層には銅鏡保有に性差が存在していたことを示しており、より大きな鏡を女性が保有していたことがわかります。

2. 弥生時代における銅鏡の保有

次に日本列島の様相をみてみましょう。前漢代並行期には弥生時代中期が含まれており、日本列島では弥生時代中期後半（紀元前一世紀）に前漢王朝からもたらされた多数の鏡が副葬されています。なかでも注目されるのは福岡県糸島市三雲南小路1号甕棺墓・2号甕棺墓と同春日市須玖岡本D地点墓です。

三雲南小路1号甕棺墓・2号甕棺墓は特定区画墓で確認された2基の埋葬施設で、前者は『魏志倭人伝』にでてくる「伊都国」の王墓（男性）、後者は王后墓と考えられています。1号甕棺墓からは約35面の鏡が出土しており、27・3㎝に復元される大型の鏡をはじめとした15㎝以上のもので構成されていました。これらのほとんどは前漢後半に製作されたものですが、2面は前漢前半のものです。一方、2号甕棺墓には22面以上の鏡が副葬されていましたが、そのすべての鏡は前漢後半のもので、1面の11・4㎝のものを除いて、いずれも10㎝未満の小型鏡でした。このように三雲南小路遺跡では王墓と王后墓に面数、サイズ、鏡の種類の上で明瞭な差異があったことがわかります。これに対し、須玖岡本D地点墓は『魏志倭人伝』に記された「奴国」の王墓（男性）とされています。三雲南小路遺跡と異なる点は、須玖岡本D地点墓は王墓が単独で存在していることです。また、鏡の種類やサイズの特徴も異なっています。須玖岡本D地点墓では約30面の鏡が出土していますが、サイズは23・6㎝から7・7㎝までのものがみられ、さらに前漢前半の草葉文鏡から前漢後半までの鏡がまとまって出土しています。このような姿は伊都国の王墓と王后墓をミックスしたようにみえ、王がすべての鏡を独占しているようにも思えます。そこからは性差という意識は感じられません。

このように同じような時期、経緯で銅鏡を入手した国々においても、その扱いは異なっていたことがわかります。

まとめ

本論の検討では、漢代の鏡の保有では女性が男性よりも優位性を持つことがあったのに対して、鏡を受容した北部九州では男性が面数、サイズ、鏡の種類の面で優位に立っていた様相がみえてきました。権威を有する者は大きな鏡を複数面保有するという前漢王朝の規範は北部九州でも貫徹されていますが、性差の表出という側面はそのまま受け入れられてはいなかったようです。そこには北部九州の国々の独自性が垣間見られ、新たな価値体系が創造されたと考えられます。このように性差は社会構造を読み解く重要な視点であり、今後は他の考古資料からの検討も期待されます。

●連載●イギリス女性生活誌

第50回

ミッシング・リンクであることを期待された女性たち

松浦　京子
京都橘大学名誉教授

伝道組織（ランヤード・ミッション）に雇用され、労働者階級家庭を訪ねて聖書購入を勧めるバイブルウーマンと呼ばれた女性たち。彼女たちは伝道活動の末端を担うばかりでなく「有用な生活知識」の伝達をも行う教導者的存在にもなっていく。この点についてもう少し触れてみたい。

バイブルウーマンの活動人数は、ランヤード・ミッションの発足時の数名から着実に増えて一〇年後の一八六七年には二三四名となり、以降も年度ごとに増減はあるものの二〇〇名前後の規模が維持されている。そして、ヨーロッパ、中東から極東まで活動の場を広げるなどその活躍ぶりは目覚ましいものであった。例えば、ランヤード・ミッションの発展ぶりに注目したエジンバラの伝道組織シティ・ミッションが自らの参考にしようとして観察聞き取りを行い、バイブルウーマンの活動内容や求められる資質を報告にまとめているほどである。バイブルウーマンの存在がランヤード・ミッションの成功の核として注目されていたことを示すものである。

では、このエジンバラ組織の報告で描かれたバイブルウーマンの姿とはどのようなものであったろうか。報告は、ランヤード・ミッションの広報誌『ミッシング・リンク・マガジン』の一八六八年版に、ランヤード夫人の確認と補足のもと「バイブルウーマンとその使命、スコットランドからの書簡」と題されて掲載された。牧師であった執筆者は、彼女たちの第一の義務は聖書の割賦購入の勧誘であり、訪問に際して聖書の片句を日常の些細なことに関連付けて語り、日々の関心対象とすることと書いている。そして、それに加えて、訪問先の貧しい母親たちの「友」となって生活改善の手助けをすることも重要な任務であるとし、また、母親ばかりでなくその娘たちにも注力し勤勉、清潔、良好な仲間づきあい、家事への嗜好を涵養するように努めていることにも言及している。

それゆえ、「魂の救済を至上の喜び」と認識する篤い信仰心があることがバイブルウーマンとなるための必須条件であると指摘する一方で、訪問先の母親たちの信頼を得ることのできる賢明さ、慎重さを持ち、快活、親切、純粋さなどの美質も必要と述べ、加えて生活改善指導を担う者として温情、忍耐、努力なども欠くことなく備えていなければならないとする。そして、信仰上の熱意は知識に基づくものでなければならないとして聖書と説教から学びつづける姿勢を彼女たちに認めつつ、「回心したばかりの者」「無垢ではなかった者」が最も望ましいのだと看破している。また、最後に、現在の不満の多い状況から逃れる手段としてバイブルウーマンを志望するのは最大の誤りであり、かつ経験の浅い若い女性はもってのほかであると書いている。この下りからは、バイブルウーマンが労働者階級女性にとっての望ましい仕事として捉えられる向きがあるとしても、清浄無垢な存在などではない人生の機微を知り尽くした年配者が相応しく、実際にも活躍しているのだという認識が読み取れる。

バイブルウーマンとは、貧民にとっての教導者であると熱意を込めて語られる存在であったのである。

このように活躍ぶりが認識されていたバイブルウーマンであるのだが、残念ながら、ランヤード・ミッションは彼女たちのプロフィールの詳細を明らかにしていない。広報誌に残る活動報告や観察記にはイニシャルでのみ表記されていたのである。彼女たちは公的には奉仕者集団として存在するのみであり、個別の素顔についての情報は必要ないと認識されていたのだろうか。

それでも、ときおり掲載される紹介記事や死後に書かれる追悼文（これですらイニシャル表記である）から、そのプロフィールをさぐってみると、まず浮かんでくるのは、世の辛酸をなめてきた苦労人であるという人物像である。親兄弟、夫や子供など愛する者との死別の苦しみを味わいながらもなお、「神の愛」を信ずることのできた者であったり、また、現世での生活に悩み苦しみ、それゆえに自身の死後の救済に強い執着を持つもののキリスト教的原罪の意識に苦しみ、しかし、結果的には篤い信仰心によってその苦悩から解放された者でもあったりする。つまり、そうであるがゆえに、彼女たちは同胞に対しても「救い」の手を差し伸べたいと強く願う者たちとなるのということである。そして、この点において信仰による救いの伝道者、加えて生活改善という現実的救いにつながる教えの伝達者たり得ると期待されたと言える。

最後に、バイブルウーマンに関する貴重な情報源である広報誌のタイトルについても触れておこう。ミッシング・リンク、すなわち「隔たっている二つの事象をつなぐ環」を意味する言葉が用いられているのだが、そのわけは、バイブルウーマンの活動こそがそうした「環」となる、つまり、労働者階級と中流階級という隔絶し対立的でさえある二つの社会層をつなぐ存在となることを、ランヤード夫人が祈念し期待したからであった。そして、「つなぐ」とは、この場合、ランヤード夫人のような貧民救済に熱心に取り組んだ「恵まれた人々」である中流階級が信奉するもの、すなわち信仰や、正しく有用であるとされる知識や考え方なりを貧民たちに伝え導くことであった。まさに、悲惨な状況から貧民を「救う」ための教導者的役割を果たすこと、それがバイブルウーマンの本分であると語る名称であったのである。

では、彼女たちはいったいどのようなことを伝え教ようとしていたのだろうか。次から考えてみたい。

Mrs.Collier, *A BIBLE-WOMAN'S STORY*, London,1885の内表紙挿絵。
バーミンガムでバイブルウーマンを務めたコリア夫人の自叙伝として1860年に発行され、バイブルウーマンの活動への関心が高まったことから25年後に再編刊行された。訪問活動がまずは家の前で声をかけることから始まることが示されている。

近代日本音楽史を彩る女性たち

11 最初の声楽リサイタルを開催した日本人 原信子（その1）

佐野 仁美
本学発達教育学部
児童教育学科教授

三浦環の後継者と目されたのが、原信子（一八九三―一九七九）です。今回は帝劇オペラの終焉まで、次回は浅草オペラ以後の原の活動を辿りましょう。八戸生れの原は、芝居や踊りが好きな父を持ち、幼少期に上京しました。教会のオルガンや賛美歌に親しみ、宣教師から音楽の手ほどきを受けた原は、三浦環の歌に憧れて一〇歳で弟子入りし、東京音楽学校ピアノ科に入学します。フランス帰りの神戸絢（かんべ）にピアノを師事し、外国人教師のユンケルに認められて念願の声楽科に進み、ペッツォールド夫人につく一方、辛亥革命のため、一九一一（明治四四）年に来日したイタリア人テノール歌手、サルコリーにも師事します。中国に渡ったサルコリーから勧められ、原は音楽学校を中退して母と共に上海に行き、ビクトリア座で三週間、《蝶々夫人》《トスカ》などを歌い、評判になりました。東京音楽学校では、一九〇三年のグルック《オルフェウス》の上演以来、オペラは禁止されていたのです。原は、おそらくオペラの中のアリアを歌ったのでしょう。一九一二年一二月一五日の東京朝日新聞には、「原信子がサルコリー氏に従って上海に渡り其の美音と艶姿を以て稍々低き意味の賞賛を博した」と報じられています。

帰国後の原の活動では、一九一三（大正二）年三月二六日に帝国ホテルで行われた「第一回新興音楽演奏会」に注目してみましょう。これは後援者の「とりで歌劇会」が主催した、日本人で初めての声楽リサイタルとなりました。音楽に熱烈な愛をもつ青年で構成されたこの団体は、古典に囚われているアカデミー（東京音楽学校）に対し、すべての音楽に目を向け、実演によって歌劇の問題を解決することをポリシーにしていました。やや頭でっかちの感じもしますが、この会は日本で演奏されることの稀な音楽を取り上げ、当時一般的な、寄席のように出演者や楽器を替えて演奏する音楽会の不調和、不統一を改めようとした進取的な企画でした。プログラムは、第一部がグノー《ファウスト》、トーマ《ミニヨン》、ドリーブ《ラクメ》などのフランス音楽、第二部がヴェルディ《椿姫》、プッチーニ《トスカ》《蝶々夫人》などのイタリア音楽で構成され、とりわけ西洋の最新傾向のオペラ、ドビュッシーの《ペレアスとメリザンド》が演奏されたことからは、並々ならぬ意欲がうかがわれます。

一九一三年三月二七日の読売新聞には、「朗々たる美音で…それぞれの感情を巧みに歌い分けた」との原の演奏ぶりが、同日の東京朝日新聞では、歌が上滑りしていたという評が掲載されています。一九一三年五月号の『早稲田文学』では、全体に曲の理解があまりに乏しいとしながらも、音楽会の趣旨や形式には賛意を表しています。原が一一月に出演した別の洋楽演奏会を開いたのも、帝大一高慶応の学生の会でした。外国人教師につき、海外で演奏した原は新しい音楽を取り上げましたが、それを熱心に支えていたのは、最新の西洋文化に目を向けていた若い学生たちだったのです。

三浦の後任の教師として帝劇歌劇部に招かれた原は、ロンドンの劇場で振付をしていたイタリア人舞踊家のローシーが演出した、一九一三年六月のモーツァルト《魔笛》に出演します。帝劇はオペラにダンスの基礎が必要なことを感じて、一九一二年にローシーを招きましたが、彼が最初に演出した《魔笛》は、小林愛雄が訳して約一時間に短縮したものでした。現在とは違って、帝劇でオペラは、歌舞伎などの間に上演されたのです。パミーナ姫と夜の女王との二役を演じた原は、後に『婦人文芸』一九三五年三月号で、歌は誰よりも先に覚えたが、「お母さま、お母さま、私は何処に居るのでしょう」という台詞を言うのが、本当の河原乞食になるような気持がしてやる気になれなかったと回想しています。「河原乞食」という言葉からは、当時の人々の女優を見る眼がいかなるものか、また原自身も、芸術的な歌唱と台詞を線引きしていることがわかるでしょう。

ローシーは団員たちに厳しい訓練を行いましたが、団員の実力では本格的なオペラは難しいと考え、喜歌劇に方向転換していきます。原が出演した一九一四年一〇月のオッフェンバック《天国と地獄》（小林訳）について、一〇月六日の東京朝日新聞には、歌ながらの台詞もどうやら耳慣れてきて、踊りも軽く、歌も進んだという評が掲載されました。ローシーの指導により、帝劇オペラの舞台も次第に整ってきたのです。

原は、一九一四年一一月二四日の読売新聞で、自分の歌劇はオペラを知らないでする歌劇であること、指導者も競争相手もいない現状で向上を図るには、本場の舞台で種々苦しまねば駄目だと考えることを述べ、翌年六月に渡米します。松影山人はサンフランシスコにおける原の試演について、一九一五年九月号の『国家及国家学』の中で、音量も声も（日本人としては）上出来だが、少しもパーソナリティが現れていないという白人声楽批評家の言葉を紹介し、本邦人が西洋の事を模倣するのは皆此（みなこの）結果に陥ること、音楽を学ぶなら先第一に其国語を学んでかからねば駄目だと述べています。

ローシーと喧嘩した石井漠が去った帝劇から呼び戻された原は、同年九月一〇日の読売新聞に掲載された帰朝談で、第一次世界大戦で敵対していたドイツ人とも音楽を通して打ち解け、音楽家からは日本という固有の性質が自然と芸術に現れることを失わないように助言されたと述べています。そして、ピアノは難しくとも、弦楽や声楽は努力をすれば、決して欧米人に劣らないと語っています。言葉の壁が高く、西洋人から「物まね」と見られがちな日本人声楽家が自らの表現まで行きつくのが難しいこと、原が努力次第で西洋人と渡りあえると感じたことがわかるでしょう。

帰国後の原は、九月のスッペ《ボッカチオ》公演に男装でボッカチオ役を演じ、好評を博しました。帝劇歌劇部は一九一四年に洋劇部と名称を替え、通俗的洋劇の上演に切り替えようとしていましたが、経済的に行き詰まり、ローシーの契約が切れる一九一六年五月の《古城の鐘》を最後に解散します。聴衆が育っていない大正はじめの日本で、オペラは時期尚早だったのです。

（以下次号）

写真1
1914年9月の帝劇公演で「ボッカチオ」に扮した原信子（『浅草オペラの生活』口絵）

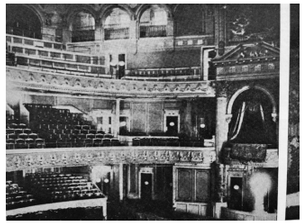


写真2
帝劇内部の客席（『帝劇の五十年』8頁）

【主要参考文献】
秋山龍英編著『日本の洋楽百年史』第一法規出版、一九六六年。
内山惣十郎『浅草オペラの生活―明治・大正から昭和への日本歌劇の歩み―』雄山閣、一九六七年。
帝劇史編纂委員会編『帝劇の五十年』東宝、一九六六年。
増井敬三『日本オペラ史～一九五二』昭和音楽大学オペラ研究所編、二〇〇三年。
宮沢従一編著『明治は生きている―楽壇の先駆者は語る―』音楽之友社、一九六五年。

2024年度 女性歴史文化研究所シンポジウム

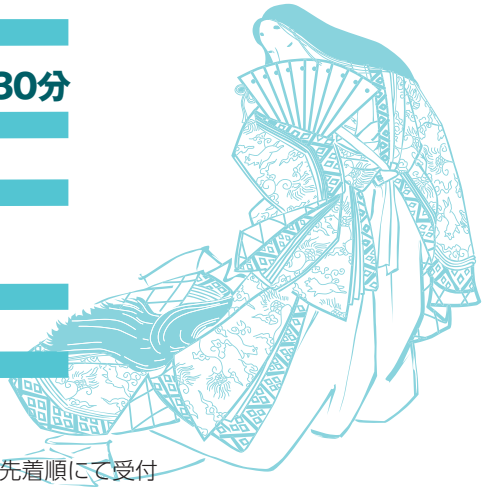
INFORMATION

「紫式部と女房の時代」

平安時代の政治や社会・文化に関する研究は近年大きな進展をみており、同時代の後宮や天皇・皇妃に仕える女房の職掌・文化活動のあり方などについても新たな知見が蓄積されています。

今回のシンポジウムは、摂関期（平安時代中期）における宮中・後宮や女房に焦点をあて、本学所縁の研究者に最新の研究成果を紹介していただきます。

また、藤原氏が拠点とし、『源氏物語』ゆかりの地でもある宇治市長にもコメントをいただく予定です。



日　時

2024年6月15日（土）13時00分～16時30分

会　場

キャンパスプラザ京都　JR「京都駅」中央口より徒歩約５分

講　師

福嶋　昭治（園田学園女子大学名誉教授／元京都橘大学文学部教授）

増渕　　徹（京都橘大学名誉教授）

コメンテーター

松村　淳子（宇治市長）

司　会・コーディネーター

野村　倫子（京都橘大学文学部日本語日本文学科教授）

＜受講料＞ 無料　　**＜定員＞** 250 名　＊４月15日（月）より先着順にて受付

＜申込方法＞

本学 HP の申込フォーム（右記二次元コードからアクセス）・E-mail・電話・FAX にて受付。
①講座名 ②氏名（漢字・フリガナ）③郵便番号 ④住所 ⑤電話番号を添えてお申込みください。
複数名でお申込みの場合は、全員分のお名前をお知らせください。

＜申込・問合せ先＞

京都橘大学 女性歴史文化研究所（学術振興課）
TEL. 075-574-4186（直通）　＊受付時間 9：00～17：00（土日祝を除く）
FAX. 075-574-4149　E-mail aca-ext@tachibana-u.ac.jp

LIME 通信

新春、『源氏物語』の作者、紫式部の波乱万丈な人生を描く大河ドラマ「光る君へ」の放映が始まり、当時の歴史文化やゆかりのある観光地に脚光が集まる一年になりそうです。本研究所でも今年６月、シンポジウム「紫式部と女房の時代」を開催いたします。

現存する日本最古の長編小説『源氏物語』は、千年の時を超えてなお、現代語訳だけでなく 30 ヵ国以上の言語に翻訳がなされ、映画や漫画といった二次作品の多さでも他に類を見ない世界に誇る文化遺産です。私自身も学生の頃、大和和紀の漫画『あさきゆめみし』で沼落ちし、瀬戸内寂聴訳版を財布の底をはたく一気買いをしてまで読みふけったもので、くしくも現在「宇治十帖」ゆかりの地に暮らしているのも不思議な縁を感じます。

この傑作小説であまりに名高い紫式部ですが、彼女自身の生きざまについてはあまり知られていないのではないでしょうか。寂聴さんは現代語訳を手がけた理由に「子持ちの若い未亡人だった紫式部の天才に、目をみはってほしかった」と述懐しています。紫式部自身は辞世の句で“誰か世に ながらへて見る 書きとめし…”（いったい誰が生き長らえて読んでくれるだろう）と憂いています。しかし、女性の身の上を嘆いた紫式部の厭世的で鋭いまなざしには、現代に生きる私たちへの色褪せないメッセージが隠れているのかもしれません。　（西野）

CHRONOS（クロノス）　vol.50
発行日：2024 年 3 月
発　行：京都橘大学　女性歴史文化研究所
〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34
Tel.075-574-4186 Fax.075-574-4149
E-mail：iwhc@tachibana-u.ac.jp

京都橘大学
女性歴史文化研究所